

## 近代ヨーロッパ・ヒューマニズムの原点を探る —中世の克服を目指して古典古代への回帰を—

### Exploring the Origin of Modern European Humanism: Return to Classical Antiquity with the Aim of Overcoming the Middle Ages

平賀 明彦\*

#### はじめに

これまで、14、15世紀のイタリア・ルネサンス期を起点に、17、18世紀のドイツに至る、ヨーロッパ・ヒューマニズムの生成、発展、完成の道筋を、16、17世紀ごろのフランス、あるいは16～18世紀ごろのイギリスなどの実情も視野におさめながら検証してきた<sup>1)</sup>。その過程は、まさしくヨーロッパの近代化過程の道筋であり、それ以前、1千年以上に及ぶ中世封建制のさまざまな桎梏から脱し、自由と民主主義に象徴される新たな段階を切り開こうとする道程でもあった<sup>2)</sup>。

例えば人文主義の成り立ちの経緯を見ても、このような姿をながめることが出来る。この時期、地中海貿易から大航海時代の世界貿易に向けての飛躍的な経済発展の中で、イタリア諸都市、すなわち、ベネツィア、ジェノヴァなどの地中海諸都市、ミラノ、フィレンツェなど毛織物工業で発展した諸都市では、大商人たちが莫大な富の蓄積を背景にパトロンとして文化人・芸術家を保護した。フィレンツェのメディチ家、ミラノのビスコンティ家などがその典型である。例えばメディチ家は、15世紀から18世紀にかけて、フィレンツェを中心に繁栄を誇った財閥で、もともとは銀行業で財をなし、外交官・政治家としても活動するなど財力を背景に、王家との婚姻関係を結び、一族は強大な力を発揮した。ルネサンス芸術・文化の庇護者としても重要な役割を果たし、その財を基礎

にパトロンとして多くの芸術家・学者・文化人を招き、また文献の収集を行った。ビザンティン帝国の崩壊の際には、その領内にあった古代ギリシャ・ローマの古典や写本を系統的に収集しメディチ家蔵書として保存に努めた。それらを納める図書館をミケランジェロに建てさせ、人文主義者の古典研究の拠点として機能させたのである。

この例以外にも、西洋文明と古典古代との関係については、11世紀中頃の前後で大きな違いがあったとの指摘がある<sup>3)</sup>。それによると、11世紀中頃以前に、ギリシア語から翻訳されたものは、聖書と、プラトンやアリストテレスらのわずかな著作、若干の数学、医学の書といったものだけであった。それが、11世紀中頃以降、ビザンティン帝国との接触や度重なる十字軍の東方遠征などにより、大きく変化し、ギリシア古典の数々がラテン語訳されて相当出回ることになった。東方への関心が急速に高まったのである。それ以前には、大学でギリシア古典が講じられることはなく、図書館にもギリシア語写本はほとんど収蔵されていなかったが、しかし、16世紀末頃になると、主要大学ではギリシア語とギリシア文化に関する教育が整備され、ギリシア語の多数の原典がラテン語に、そしてそれぞれの国の言語に翻訳され普及していった。そういった中で、とりわけ、言語学、文献学の領域でギリシア研究が深められたのである。そこには、ギリシアの古典文化に重きを置いていたビザンティン帝国の役割が大きかったと言

\*白梅学園大学名誉教授

われている。

イギリスを含めた西ヨーロッパ全体で、このようなプロセスが展開していく中で、非常に大規模にした時、そこには二つのきっかけがあったことに気がつく。

一つは、自然科学の発達の契機であった。すでに前稿<sup>4)</sup>で触れたように、西ヨーロッパが中世を克服するきっかけは、自然科学の長足の進歩を背景としていた。ガリレオ・ガリレイに典型的に示されていたように、博覧強記と評される逸材が次々と現れ、各分野で新たな発見、発明を成し遂げ、人々の生活そのものを一変させるような出来事を起こし、積み重ねていった。

この大いなる転換の代表例としてコペルニクスの転換が取り上げられることが多い。周知の如く、コペルニクスが、すでにヘレニズム時代に提起されていたアリストルコスの地動説を復活させ、そこに科学的証明を与え提唱したのは16世紀初めのことであった。そして、それを継承したジョルダーノ＝ブルーノは、宇宙は無限であることを主張し、コペルニクス説を支持した。しかし、時の教皇クレメンス8世は、これを認めず異端審問の開始を命じた。その結果、異端の烙印を押されたブルーノは火刑に処せられたが、その後、ドイツの天文学者ケプラーは、膨大な計算式の解析から惑星の運行の法則を割り出し、地動説に科学的証明を与えた。この後、ガリレイが30倍の天望遠鏡を完成させたことで、天文学は飛躍的な発展を遂げ、木星の衛星、土星の環、金星の満ち欠け、太陽の黒点あるいは太陽そのものなど、太陽系の諸惑星について多くのことが明らかにされていった。その過程で、地動説についてもあらためて証明されたのであるが、ガリレイがローマ教会の宗教裁判により弾圧が加えられたことは良く知られていることである。

また、この時期、人間や畜力以外のエネルギー源が発見され、実用化されたことも重要な転機をもたらした。それらは生産活動に多大な影響を与え、生産性と効率化を一挙に高めることによって、

生産力の発展を生み出し、それに見合った新たな生産関係の創出を促すこととなった。

生産水準は急速に高まり、当然ながら、それともなって物流システムも大きく変化し、そのことによって、人々の集住の在り方や生活スタイルにも多大な変化が現れた。それは現象的には、各地での都市の著しい発展と、産業としての商工業の急速な進展として立ち現れる結果となった。何れの地域でも、農業中心の産業構造が変化し、その結果、土地所有のヒエラルキーによって成り立っていた社会の秩序構造は覆り、新たに隆盛となった商工業の根拠地とその担い手、すなわち都市とそこにおける新興の資本家、商工業者たちが歴史の表舞台に立ち現れることに結びついていった<sup>5)</sup>。

この頃の中世封建制を克服する取り組みの、大きな特徴のもう一つは、古典古代への回帰であった。この時期の一連の流れの起点となったイタリア・ルネサンスはもとより、そこで生まれたヒューマニズムの思潮が、アルプスを越え、フランス全土を駆け巡り、ドナーを隔てたイギリスと緩衝し合いながら、ドイツに流入し、一つの到達点に至る過程では、それぞれの拠点で、常に古典古代への回帰が真摯に取り組みられ、そこでの新たな発見や学び直しが、ヒューマニズムの展開過程で大きな意味を持っていたことが共通していた。

「近代最初のヨーロッパ人」と評され、「ヒューマニズムの父」と言われたペトルルカは、共和政ローマ末期の政治家であり哲学者であったキケロに着目し、その膨大な書簡集を復刻するとともに精緻な分析を行い、古典古代の文芸を再生するという、まさにルネサンスそのものの体現者としての役割を果たしていたのである。良識深い人格を身に付け、高い教養と道徳的な態度を併せ持った人間の在り方を称揚していたキケロは、紀元前80年、すでに「フマニタス」という言葉を生み出しており、このルネサンス期のペトルルカにとって、格好の顕彰対象であったのだろう。その影響は後代にも引き継がれ、エラスムス、モンテスキュー、

カントなどにも多大な影響を与えたと言われている。

また、例えば、フランスにおけるヒューマニズムの生成・発展過程で、その代表的な担い手となったモンテーニュを見ても、若い頃からギリシアを中心とした古典古代の文献に耽溺し、そこから多くの啓示を得る中で、自己の思想形成を果たしていったことが『エッセー』などを通してうかがえるのである<sup>6)</sup>。ここからは、古代の思想家に学びつつ、自然、社会の事物、事実を同列において対比し、考察することで客観的な見地から真実を発見しようとする思考法が看取される。知識の集積より思考と判断力の自在な活動を重視するこの姿勢は、ルソーの近代教育思想や、デカルト、パスカルの近代哲学に大きな影響を与えることになったのである。

そういった点では、ヨーロッパ・ヒューマニズムの形成過程では、それが、そもそも中世の超克を目指していたことから言っても、そしてそれだからこそ、拠り所を中世以前に求めようとした点から言っても、古典古代への回帰は必然であったと言える。では、実際に、ヒューマニズムの担い手たちは、古典古代のどのような点に着目し、そこから、具体的にどのようなことを見出そうとしていたのか。ここでは、その点について検証を試みようと思う。

### 神から人間へ—自然科学発達の契機

ヨーロッパ・ヒューマニズムの出発点は、ほぼ例外なく古典古代への回帰とそこからの学びに求めることが出来そうであるが、それはまた、近代化過程を歩もうとしていたヨーロッパが、その目的達成のために、克服し、乗り越えようとしていたものが、まさに中世世界であったことと結び付いていた。土地領有を仲立ちとして、ピラミッド型に支配—被支配の関係が確立していた封建制と、精神世界をキリスト教によって厚く覆われていた中世は、一口に言えば、絶対的の神への信仰が、人々の精神世界はもとより、社会構造的な面でも、

全体を覆いつくす特徴を備えていたと言える。そのため、近代化過程は、必然的に、そのような中世の超克、すなわちキリスト教的世界観からの脱却を目指すこととなった。超克とか脱却という表現は、この後の歴史過程から考えても、少し強過ぎるかもしれない。言い方を変えれば、古典古代に形作られたヒューマニズムの原型が、中世において完全に寸断されると前提することの妥当性を、どこまで承認するかという問題とも言えるかもしれない。すなわち、「古典に現れた人間性への敬意とその再興を希求する意志は、14世紀を待たずとも、中世全般にわたって恒常的に存在した」とする捉え方で、ローマの芸術形式の復興が非常に強く推し進められた「9世紀のカロリング・ルネサンスと呼ばれる運動」をどのように位置づけるかといった課題はやはり持ち越されていると考えるべきであろう。その点の吟味は、もとより重要であるが、本稿では、主目的のための作業仮説といった位置取りで、コントラストの方を強調しておくことにする。科学的合理性の見地から、少なくとも、神の絶対的な存在への懐疑を足掛かりに、その客観化、相対化が、自覚的、意識的に行われた点を重視したいと考える<sup>7)</sup>。

その契機は、これまでも折りに触れ指摘したように、この時期の自然科学の長足の進歩であったと考えられる。人力、畜力以外のエネルギー源の発見を典型に、その応用などを通しての新しい発明やその実用化が次々と達成される中、それらは経済活動にそのまま反映され、また、種々の領域に広がって全体を革新することによって大きな変革をもたらすことになった。そして、それは社会構造上の目に見えるところだけでなく、人々の精神世界にも多大な影響を与えることとなった。

これまで、不思議と思われた現象や、自然の力によりもたらされた様々なことは神の為せる技として説明され、また、理解されて来た。しかし、それらの多くが奇跡でも神秘でもなく、原理に基づいていること、原則を持っていること、そしてさらに、法則性すら持ち合わせている場合が多い

ことが実証されたのである。実験などの科学的手法によって、その確かさが人々の前で証明され、論拠が与えられることによって、その確認作業が蓄積されていった。それはまた、神秘主義のヴェールで覆われた神の絶対性が掘り崩されていく過程でもあった。

但し、そのことは、信仰そのものが失われるといった意味ではない。中世の長い期間を通して、教会勢力が、国王や貴族あるいは領主層や騎士層などととも支配勢力の主部を形作っている状態の中で、その必要から、自ら編み出していった支配のテクニックが、科学性とそれを支える合理的思考の前に、その虚構性が暴かれていったと捉えることができるだろう。その意味で、精神世界における宗教的信仰の問題とはディメンションを異にしていたという言い方も可能かもしれない<sup>8)</sup>。

すなわち、教会は神の代理として、精神的救済を求める多くの人々に対し、また、神に委ねられた権限で祭祀を行い、神の賜物を配分するという行為を主管することで、その期待に応える役割を果たしていた。聖母マリアを中心とする聖人崇拜、水で洗い清めることによって、古い自己から新しい自己へと生まれ変わることができるとされた「洗礼」、司祭のもとで自分の罪を告白することによって神から罪の許しを得ることができるとされた「告解」、キリストの体と血を象徴するパンと葡萄酒を食することで、キリストの死によってもたらされた救済の力を得ることができるとされた「聖餐」、などからなる7つの秘跡により、神の神秘を伝達するといった行為を通して権威を確立した教会だったが、その宗教的儀式や儀礼を含め、全てを神の摂理によって説明しようとする仕組みが、科学的合理主義の前に、一定の方向修正を余儀なくされたと言って良いであろう。そのきっかけは、教会勢力によって、それらが資金収集の手段とされたり、明からさまな民衆支配のツールとされたりする現状への抵抗であり、反対の動きであって、それらが宗教改革という形で一つの大きな潮流を形成していったことは、すでに周知のこ

とである。

## 古典古代の探究

このような科学的合理主義の展開の中で、宗教世界でも一定の洗い直しの動きが見られ、人々の信仰心を煽るための非科学性の克服が進められていった。そこでは、神の絶対性が揺らぐ中で、そういった自然科学の発展や、その応用による日常生活そのものの改善に対する深い信頼が芽生えることとなり、その過程を領導している担い手、すなわち、自分たち人間に対する、あらためての存在認識と価値基準上の見直しのようなものが進んでいったと考えられる。そして、神から人間への、そのような価値転換が図られる道程では、当然のことながら、人間そのものを見つめ直す姿勢が形作られ、実際に人間研究とその掘り下げが行われていった。その際、歴史的経緯を問題にする時、近代化過程が進んでいたことと関わって、克服すべきと考えられた前時代、すなわち神の絶対性を最大限に活用し、教会勢力を含めた支配層によって、幾重もの呪縛に封じ込められた中世は、到底範たり得ないものとして認定され、暗黒の時代とさえ位置付けられた。そこで注目を浴びることになったのが中世以前の古典古代であった<sup>9)</sup>。

そのような時代状況の担い手となった最初の代表的な人物は、ペトラルカであった。前述のこと以外に、彼はキケロの著作に範をとってラテン語を整備したことで知られている。14世紀、フィレンツェの詩人、学者として活発に活動した彼は、まさに「古代狂」と称されたように、ラテン語の整備を土台に古典への探究にエネルギーを取り組み、キケロの演説などを素材に、古典文化の復元とその探究に並々ならぬ力を注ぎ、充実した成果を挙げていった。人間の本質を究めることが学問の課題であり、人間存在とその生の意味を追求しようとする学問は無意味であるとまで言い切ったのである。キリスト教と古典文化の調和を一貫して目指していた彼は、それ故に人文主義者の先駆としての位置づけを与えられたのである。

ペトルルカは、また、アビニョン、ポローニヤなどでも幅広い活動を展開し、多くの門人を集めたと言われている。当時のイタリアは、先に触れたように地中海貿易から大航海時代の世界貿易へ移り変わる途次であり、ベネツィア、ジェノヴァなどの地中海諸都市とともに、ミラノ、フィレンツェなど毛織物工業で発展した都市の大商人たちが、莫大な富の蓄積を背景に、文化・芸術運動を積極的に後押しした。フィレンツェのメディチ家、ミラノのビスコンティ家などの資産家、商工業者たちが、都市を基盤にパトロンとして、多くの文化人・芸術家を庇護し、その旺盛な活動を背後で支える重要な役割を果たしていたのである。例えばメディチ家は、ビザンティン帝国の崩壊時に、その領内にあった古代ギリシャ・ローマの古典文献や数々の写本を系統的に収集・保管することに努め、ミケランジェロに命じて図書館を建て蔵書として収納した。そこは、当時の古典研究の拠点となり、古典古代への関心を高める中心的役割を果たすことになった。

14世紀を通して、自ら詩人、学者でもあり、また人文主義者として活動したペトルルカは、ビスコンティ家の庇護を受け、ギリシア語の普及にも精力的に取り組み、その成果として、この時期ヨーロッパ全体にギリシア語が広まっていき、古典研究がさらに活発化する成果をあげていった。その後、この系譜は、世紀を超えてオランダのエラスムスに引き継がれ、古典研究の裾野が広がっていったのである。

エラスムスは、聖書研究を深めるとともに古典研究でも多くの業績を残した。ギリシア、ローマ時代の詩人、哲人の遺産に学ぶことを提唱し、また、その一方、古代文献の活字化でも多大な功績を残した。そして、その成果として著された16世紀初頭の『愚神礼賛』は、当時のキリスト教会の頹廢と、神学界で交わされていた教義にまつわる無為な論争を痛烈に風刺し、中世の教会が作った儀式やしきたりは二義的で、それぞれの人々の神との結びつきを求める心からの飾りのない信仰こ

そが大切で、そのことによるのみ、幸福と満足は得られると主張していた。「人知による捏造や人為の制度」からキリスト教を解放することを目指していたのである。

### 古典古代からの学び

中世の教会の腐敗を正し、あり得べきキリスト者の在り方を問い直すとする姿勢が、新しい時代を切り開こうとしていたのであるから、その拠って立つ基盤、模範として学ぶべき対象が中世に置かれることはあり得ず、その一つ前の時代、すなわち古典古代に視点が据えられるようになったのは当然のことであった。ペトルルカ、エラスムスにも共通していたように、ヒューマニズム形成の源は、そして実際の手法は、古典古代への回帰だったのである。

それでは、彼らは古典古代の学びの中で何を獲得していったのであろうか。最古の叙事詩、ホメロスの作とされる『イーリアス』と『オデュッセイア』<sup>10)</sup>を例にとって探ってみよう<sup>11)</sup>。

吟遊詩人、ホメロスは、紀元前8世紀ごろの人とされているが、実在の人物かどうかどうかすら議論があるぐらい、不確かな部分も多い。盲目であったとも言われているが定かではなく、出生地についても諸説があり、確証が得られておらず、家系も明らかになっていない。そういったことの実偽のほどはともかく、残された叙事詩の文学的価値は高く評価され、まさに古代ギリシアの教養と文化を象徴するものとして位置付けられてきた。古代ギリシアでは、教養ある市民は、ギリシア神話とともに、この両編を必ず知っていなければならぬものとされてきたのである。

最古の文学作品とされてきた『イーリアス』は、ギリシア神話を題材とし、トロイア戦争を描き、ギリシア勢を率いた勇将アガメムノンとイーリオス王プリアモスの王子、英雄ヘクトールとの戦いを中心に、長編詩として編集された<sup>12)</sup>。紀元前8世紀ごろ、口承で語り継がれていたとされているが、紀元前6世紀後半、アテネで活字化され、

現在のような形にまとめられたのは紀元前2世紀頃、アレキサンドリアであったと言われている。トロイの木馬などの数々が世に知られており、『オデュッセイア』はこの続編にあたる。イタケーの王であった英雄オデュッセウスが、トロイア戦争の凱旋時に、長きにわたる漂泊の旅の中で巡り合った出来事が語られる形となっている。『イーリアス』同様、当初の口承文学が、紀元前6世紀ごろから文字化されていったと考えられている。その編者はアテネのペリクレスとも言われているが、これも確実なところはわからない。

これらの中に描かれている神々は、最高神ゼウスを頂点に、さまざまな役割を担いながら、天界にあって、まさに一つの社会を構成している。それはまさに、人間社会と同じであり、構図として似通ったものが映し出されている。そこに住まう神々も如何にも人間的であり、その意味では現実社会の縮図のような描かれ方をしているのである。物事を決めるのに皆で集まって話し合ったり、その中で術策を練ったり、策謀を巡らしたりもする。恋愛もあれば、嫉妬もあり、また懊悩や苦悶からも解放されておらず、だから悲嘆に暮れ、号泣するのである。人間との違いは、巨大な力を備えていることと不老不死であることだけで、それを除けば、ほとんど人間と変わらない日常が営まれている。すなわち極めて人間化された存在だったのである<sup>13)</sup>。

### 神の絶対的な存在

それは、ヨーロッパ以外で受け入れられてきた神の存在と大きく違った特徴を醸し出していると言える。ヨーロッパ以外では、多くの場合、神は人間と異なるというだけでなく、人間を遥かに超えた絶対的な存在として設定される。そして、その超絶的な存在から、数々の人知を超えた行いを、当然、上から人間に下し与える形でもたらしてくる。そのため、神は人間から遠く離れた天界にある、異なった世界の存在であって、だからこそ崇高な存在であり、畏敬の対象なのである。人々は

崇め、押し頂いて、その絶大な力の恩恵に預かろうとし、また、苦難から逃れるために、その力に縋ろうとするのである。

人間化された神ではなく、絶対的な力を有し、それを振るうことによって、人々に救いを与える神という在り方に対する人々の渴望は、それ故に、ギリシア世界においても、そういった神の存在を求める素地を作っていた。実際に、これ以後の歴史の展開の中で、最高神ゼウスの下に集った天空の神々の位置づけには変化が生じていった。それはまさに、神に求めるもの、神の力を必要とする事柄が、人々のあれこれの生き様の中で、生まれ現れていたからである。日常の生活の中では、糺して欲しい不正が、当たり前のように罷り通ったり、達成したいと念じていることが、思う様にいかなかったりということが、引切りなしに次々と起こって、人々を悩ませ苦しめている。あるいは、自らの力以外の強いものに縋らなければ、解決できないことも多い。そこで、そういった自分たちを支え、助け、導いてくれる存在として、天空の神が求められ、位置づいていくのである。そして、それ故に神は、人知を超えた、全てを為せる全知全能の力を兼ね備えていなければならないのである。

そのような神の非人間化、人間的な神からの離脱と飛躍は、さまざまな角度から為されたが、神の正しさについて、形を整えたのはヘシオドスであった。紀元前700年ごろのギリシアで、叙事詩人として活躍し、労働の尊さを謳い、不正に対する厳しい姿勢で一貫していたヘシオドスは、それを神の存在に求めようとしたのである<sup>14)</sup>。

この点をさらに明確にしたのは、アテネの悲劇詩人アイスキュロスであった。アイスキュロスは、紀元前6世紀から5世紀にかけて活躍し、アテネの三大悲劇詩人の一人とされただけでなく、ギリシア悲劇の確立者としても評価されている。アイスキュロスの悲劇で描かれた神の存在は、その絶対的な位置づけが際立っていた。とりわけゼウスの唯一神としての位置は揺るぎないものがあり、

絶対神であるがゆえに常に正当であるという捉え方が導かれていく。神がいつの場合も絶対で正義であるというこの定式が、ここにおいて確立しているのである。

### 神と人間の関係性

神と人間の関係性について、その後の経過をもう少し追ってみよう。

アイスキュロスの後継者とされたソポクレスは、やはり三大悲劇詩人の一人とされることが多いが、神の存在を強くとらえる点では、アイスキュロスを凌ぐ徹底さだったと言えるかも知れない。人間の歩むべき道は定められており、それは決して神の道とは相容れない、異なるものとして想定されている。そして、神の道の偉大さは、人間のそれとは比べるべくもないものとして考えられており、そこにおける神の力、神の支配に対する絶大な評価があったようである<sup>15)</sup>。それはまた、一方での人間の位置づけの小ささとなって表現される結果となる。神の偉大な歩みに人間はその身を委ねるしかない存在になるのである。神の偉大さの前には、人間は取るに足らない存在であり、その卑小さが際立つことになる。

ソポクレス以後、ペルシア戦争からペロポネソス戦争ぐらまでの間には、アテネを中心に、人間の主体性を強く主張し、その存在を強調するソフィストたちが活発に活動した。民主制を整えていったのはアテネであったが、この戦間期の混乱に乗じてさまざまデマゴグが出現し、まさに詭弁を勞して政策を左右するようなことがしばしば起こった。それに対し、政治的主張を市民に届けようとする人々は、雄弁の専門家、すなわちソフィストに託して、その目的を果たそうとしたのである。また一方で、彼らは人間の主体的な判断を重んじ、人間の尊厳を評価する言説を事としていた。

ソフィストたちとともに、ソポクレスの後を継いで、アテネを中心に活動し、この問題に言及したのはエウリピデスであった。エウリピデスも三大悲劇詩人の一人と目されることが多いが、ソポ

クレスと同時代にアテネを舞台に活躍した。ソフィストたちの影響を強く受けていたためだろうか、人間存在そのものを重視する前提で、とりわけ人間理性への厚い信頼が語られることが多かったのである。ここに、これまでの一連の流れの一つの到達点があると考えられるが、後代になって、中世を克服しようとするヒューマニストたちが、人間、とりわけ理性的存在である人間を、殊更称揚し、人間中心主義の立脚点をそこに求めていこうとした原点があったと考えられるのである<sup>16)</sup>。

### ヒューマニズムへの道 一まとめに代えて一

これまで見てきたことからわかる通り、中世から近代への過程で、人間への着目が一際目を引く動きを見せた背景に、古典古代への回帰があったことは明らかであろう。長らく、絶対的な神への厚い信仰で成り立っていた中世社会が、荘園制の基本的仕組みが掘り崩され、新興の商工業者が台頭し、力を蓄えて行く中で、時代を支える階層に異動が生じ、自ら荘園領主でもあった国王や貴族、あるいは各地の諸侯などから、経済的実力とともに、次第に発言権を増していった都市の市民層が、大きな役割を果たすようになったのである。そして、それは経済的変化にとどまらず、広く社会全般の変容をもたらし、新しい世紀、時代を準備することとなった。

そういった中で、人々の精神世界にも大きな変化が現れた。絶対的な神の存在が、精神世界も含め、社会総体の多くの部分を占めていた中世の在り方から転じて、それら社会の変化を牽引し、成し遂げようとしている当の本人たち、すなわち人間の力に対する、それまでとは違う照射の仕方、新たな認識の仕方が徐々に芽生えていった。そして、あらためてその意味を問直す視点と、実際の取り組みが始まったのである。その人間探究の一つのルートとして、しかも、それはかなり太いラインとして、そもそもの人間理解を、これまでの歴史過程の中で検証しようとする動きが起こり、中世以前の人間の姿、在り方を追い求める姿

勢を生んでいった。ペトラルカやエラスムスの辿った道は、まさにその姿勢から導き出されたものであった。

そして彼らは、古典古代の探究を通して、そこにおける神と人間の在り方に辿り着き、そして、その分離というか、神と人間それぞれの存在意義と役割について見通しを持つことにより、人間そのものの解析に結果していったのである。それはまた、対比的な意味での、人間的なるものへの到達であり、また、その人間を基軸に、物事についての判断を下す態度、つまりヒューマニズムへの接近であり、また、準備であったと言えるのである。そういった意味での人間中心主義的な態度を最もクリアーに打ち出したのは、16世紀フランスのデカルトではないかと思う。「近代哲学の父」と言われたデカルトは、思考を本質とする精神と、空間的な広がりを持つことを本質とする物体とを、二つの自立的な実体として明確に区分する二元論を打ち立て、それをまた、新たな学問体系の基本法則として確立しようとした。そして方法論的には、数学の解析の方法を学問の普遍的方法として一般化し、これによってあらゆる学問を統一する見通しを立てた。すなわち、自然界の事物の対象化及び科学的、数量的把握と、人間精神の自立的な主体性、自由の保障により、神の存在をすべての根源とする中世世界からの明確な脱却を果たし、人間的理性の独立・自立の道を突き進む姿勢を打ち立てたのである。ここに近代合理主義の成立を求めることが出来るかも知れない。そしてまた、これまで検討してきたように、古典古代への回帰によって中世世界からの脱却を目指したルネサンス以後のヨーロッパの一つの到達点を見ることが出来るだろう。そしてその結果、ヒューマニズムの大切な要素である人間理性の尊重という点でも、その理性によって思考し、行動する人間の主体的な営みを重視し、その結果として成り立つ日々の生活、社会・国家の在り方に信を置こうとする精神・態度が、近代市民社会を形作っていく姿が見て取れるのである。

## 注

1 平賀明彦（以下、拙稿）「現代ヒューマニズムの淵源を探る—15世紀イタリア・ルネサンス絵画を素材として—」（白梅学園大学・短期大学『教育・福祉研究センター年報』19号 2014年8月）、を皮切りに、連年、ドイツ、フランス、イギリスでのヒューマニズム成立期の特徴を追ってきた。すなわち、拙稿「近代ヒューマニズム成立の時代背景とその特徴—17,18世紀のドイツを事例として—」（白梅学園大学・短期大学『教育・福祉研究センター年報』20号 2015年8月）、拙稿「近代ヨーロッパ・ヒューマニズムの生成・発展過程の探求—16世紀フランス・ユマニズムの検討を中心に—」（白梅学園大学・短期大学『教育・福祉研究センター年報』21号 2016年9月）、拙稿「近代ヨーロッパ・ヒューマニズム成立過程の研究—16～18世紀のイギリスの事例から—」（白梅学園大学・短期大学『教育・福祉研究センター年報』22号 2017年8月）といった形で一定の積み重ねをしてきた。それらにより、ヨーロッパの近代化過程で、ヒューマニズムの考え方が、どのように生成・発展を遂げてきたか、個別事例に即して明らかにしようと試みてきたのである。ここでは、それらの成果に拠りながら、全体に共通して看取できる古典古代への回帰の問題を取り上げ、その特徴を明らかにしようと考えている。

本来ならば、それら各国の検討に引き続き手掛けるべきであったが、その検討過程でヒューマニズムの精神そのものについて少し気掛かりな点もあり、そのそもそもの概念規定について検討する必要を感じ、各国史的な検証とは異なるアプローチでの分析を試みた。すなわち、拙稿「人文主義の成り立ちと展開—ヒューマニズム史研究の一つの手掛かりとして—」（白梅学園大学・短期大学『教育・福祉研究センター年報』25号 2020年8月）により、ヨーロッパ近代化の過程で、人文主義の考え方がどのように成熟していったかを検討し、先ずヒューマニ



トの存在ありきで、それらの人々の実践活動とその成果の積み重ねによって、イズムとしてのヒューマンイズムが、ずっと後になって成立することを明らかにした。

- 2 ヒューマンイズムを対象とした先行研究については、以前の論稿でも触れたが、ここでは、それらとの重複を避けながら少し触れて置く。比較的研究が集中したのは1950年代であったが、そこでは、日本ヒューマンイズム協会編『現代ヒューマンイズム講座 20世紀のヒューマンイズム』(宝文館 1956年)、務台理作・谷川徹三・他監修『現代ヒューマンイズム講座 現代ヒューマンイズムの諸問題』(宝文館出版 1969年)を挙げておこう。ヒューマンイズム研究のもう一つのピークと思われる20世紀末の文献では、代表的なものを挙げて置くと、ハイデッガー／渡辺二郎訳『「ヒューマンイズム」について』(ちくま学芸文庫 1997年)、福井一光『ヒューマンイズムの時代—近代的精神の成立と生成過程—』(未来社 1989年)、村瀬裕也『教養とヒューマンイズム』(白石書店 1992年)、深澤賢一郎『ヒューマンイズムの現在—混迷の政治の中にいる私—』(郷土出版社 1995年)、竹田宏『ヒューマンイズムの変遷と展望』(未来社 1997年)、都留重人『科学的ヒューマンイズムを求めて』(新日本出版社 1998年)。また、本稿のテーマとの関係では、田中美知太郎『ギリシア研究とヒューマンイズム』(要書房 1947年)、A・グウィン／小林雅夫・訳『古典ヒューマンイズムの形成』(創文社 1974年)。
- 3 久志本秀夫『イタリア人文主義とギリシア古典文化』(刀水書房 2000年5月)。
- 4 前掲拙稿「近代ヨーロッパ・ヒューマンイズム成立過程の研究—16～18世紀のイギリスの事例から—」。
- 5 この時期のイタリア諸都市の発展は目覚ましいものがあり、とくに地中海貿易だけでなく東方にも市場を駆け旺盛な活動を展開していた。また、毛織物工業を中心に国内の工業生産の伸

長、それにとまなう商業活動の活発化は、イタリアを豊かにし、とくに、その担い手となった商工業者たちに多くの富をもたらし、それだけでなく、その階層の社会的地位、発言権の上向にも繋がっていった。

- 6 前掲拙稿「現代ヒューマンイズムの淵源を探る—15世紀イタリア・ルネサンス絵画を素材として—」及び「近代ヨーロッパ・ヒューマンイズムの生成・発展過程の探求—16世紀フランス・ヒューマンイズムの検討を中心に—」。
- 7 科学的合理性による中世の世界からの脱却は、一般論的な言い方で、多分に象徴的な表現となっている。具体的印神秘主義のヴェールがどのように取り除かれ、どのような点で宗教的部分に科学性が入り込んでいったかについては詳細、具体的な検討が必要であろう。後日、他稿で取り組みたい。尚、引用は、前掲竹田宏『ヒューマンイズムの変遷と展望』。
- 8 前注と同様、この点でも具体的な様相を提示することが重要であるが、紙数の関係もあり、ここでは割愛した。しかし、多くの自然現象などを考えても、それまでは神秘、不思議なものとして捉えられ、それ故に神の摂理で説明され、神の力の証明に用いられて来た経緯は明らかであろう。
- 9 これらについては、前掲拙稿各編においても触れてきた。それぞれの地域で、それぞれ異なった歴史過程を経過しながら、乗り越えるべき前時代、すなわち中世の位置づけにおいては共通していたと考えられる。それ故、古典古代に範を求めようとする行動様式も共通したものがあつたと考えられる。
- 10 『イーリアス』、『オデュッセイア』ともに長らくホメロスの作とされてきたが、その真偽の程が問題になっている。ホメロス自体の存在についても疑義が出されており、今後の検討課題となっている。
- 11 田中前掲書。高津前掲論文。
- 12 A・グウィン／小林雅夫・訳 前掲書。高津

前掲論文。『イーリアス』、『オデュッセイア』に関する以下についても、同書及び同論文。

- 13 この節の冒頭にも触れたように、日本を含めた東洋的な神の在り方が、人間とは異なる世界にあって、人間を遥かに超える全知の存在であることと相違し、極めて人間的な装いを持っていたことが特徴であった。
- 14 A・グウィン／小林雅夫・訳 前掲書。高津前掲論文。次のアイスキュロスについても同書、同論文より。
- 15 高津前掲論文。
- 16 エウリピデスについては、A・グウィン／小林雅夫・訳 前掲書、田中前掲書及び高津前掲論文。